



『大正名器鑑』に収録される遠州命銘及び箱書付歌 銘茶入一覧

著者	藤原 みずき
雑誌名	國文學
巻	107
ページ	37-58
発行年	2023-03-01
URL	http://doi.org/10.32286/00028028

『大正名器鑑』に収録される遠州命銘及び箱書付歌銘茶入一覽

藤原みずき

はじめに

『大正名器鑑』^①は大正期に出版された。本書について、編者である高橋義雄（一八六一―一九三七）は、その編纂意図について次のように語っている。^②

余が本編鑑集の大願を發したるは大正元年の事にして、爾來之を実現する方法を講究しつゝ、ありしが同六年に至り、名器撮影及び彩色図木版の成績漸我が所期に達せしを以て、茲に其説明記述の様式を定め、愈々諸家の名器拝見に取掛りしに、一時に多種類を網羅せんとすれば調査上不手廻りを生じ、彼此互に混雜して共に疎漏に陥るべきを發見し、第一期計画として先づ茶器の儀表たる茶入、茶碗を取調べ、全力を此二種類に集中するの得策なるを悟れり

本書について、高橋義雄が大正期に存在した茶道具のうち茶入と茶碗の名器を実見して、その記録を、当時の最先端の印刷技術によって図鑑化したものであると記されている。個人が秘蔵していた名物茶道具の所在を明らかにするだけでなく、実物写真を掲載し、茶道具の銘にも触れて、その伝来なども文献に辿ることで詳細に記録するなど、本書の資料的価値は高く評価されている。

小稿は、『大正名器鑑』を用いて、茶道流派・遠州流茶道の流祖である小堀政一（一五七九―一六四七）（以下、遠州と称す）が記した歌銘茶入の一覽を作成するものである。歌銘とは、和歌に詠まれた詞すなわち歌語を銘とする。遠州が茶道具を命銘するにあたって、和歌に由来する銘、すなわち歌銘を好んで用いたことは周知である。遠州は茶道のみでなく、和歌や

書道、作庭など、様々な分野に才能を発揮しており、遠州が数多くの茶道具に歌銘を記したことで、遠州が和歌をよくしたことは無関係でないと考えられる。遠州を考察するにあたり、遠州そして遠州以後遠州流茶道において、歌銘を考察することが、その美意識を明らかにするうえに有効であると考えた。なお、歌銘を持つ茶道具の古い例としては、茶入「遅桜肩衝」^③が知られている。茶入「遅桜肩衝」は、足利義政（一四三六～一四九〇）が『金葉和歌集』に入集する「夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめつらしき哉」という和歌を典拠として命銘した^④。足利義政は茶入「遅桜肩衝」を命銘する以前に茶入「初花肩衝」^⑤を入手しており、「初花肩衝」より後に入手した茶入の「めづらしき」を目出で「遅桜」と命銘したのだ。そのほかにも、歌銘を記す茶道具は、千利休（一五二二～一五九一）によって命銘されたものもあり、遠州以前にも存在はしていた。しかし、遠州以前と遠州以後を比べると、明らかに遠州以後に歌銘を記す茶道具が増加する。つまり遠州が好んで歌銘を記したことが契機であったと推考されるのである。

一、凡例

一、『大正名器鑑』第一編～第五編（大正名器鑑編纂所、一八六三～一九二六年）に収録される茶入より、遠州が歌銘を記したと文書をもって伝えられているものを抄出した。

一、引用に際して、旧字体は新字体に改めた。

一、箱書の銘および和歌の書付の表記は『大正名器鑑』に従った。
一、一覧の作成に使用した参考文献は以下の通りである。

・『茶器名物図彙』^⑥

（草間直方『茶器名物図彙』上・中、文彩社、一九七六）

・『宗友記』^⑦

（小堀政方『宗友記三』、国立国会図書館デジタルコレクション）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2561538> 参照二〇二三年二月二日）

・『茶器弁玉集』^⑧

（『茶器弁玉集』『陶器全集』第二巻、思文閣、一九七六年）

・『万宝全書』第六巻「和漢茶入名物記」^⑨

（『古今和漢／万寶全書』、新日本古典籍総合データベース
<http://kotensekinijlac.jp/biblio/200000862/viewer/6> 参

照二〇一三年二月二日)

・『茶器目利聞書』⁽¹⁰⁾

(『茶器目利聞書』、国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2538400> 参照二〇一三年二月二

日)

・『名物目利聞書』⁽¹¹⁾

(『名物目利聞書』、国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2538404> 参照二〇一三年二月二

日)

・『本朝陶器考証』⁽¹²⁾

(金森得水著、堀田松三郎校訂『本朝陶器考証』艸書房、

一九三四年)

・『銘物集』⁽¹³⁾

(東京国立博物館デジタルライブラリー《銘物集》

<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/3890> 参照二〇一三

年二月二日)

二、遠州命銘及び箱書付歌銘茶入一覽

『大正名器鑑』第一編

〈漢作唐物茶入〉

○かわづ肩衝 八幡名物

内箱蓋表に「かはつ」、蓋裏に「新古今 おりにあへはこれ
もさすかにあはれ也小田のかはつのとくくれのこゑ」と書付あり、

『茶器名器図彙』は遠州筆と記す。

『大正名器鑑』第二編

〈漢作唐物文琳〉

○菅屋文琳 大名物

箱蓋表に「御茶入 菅屋文琳」と書付あり。銘の由来につい
て、『大正名器鑑』は次のように記す。

南都松屋源三郎の松屋筆記に「竹中采女所持の文琳に名を
所望にて、とまやと遠州付け候、景はなき壺なり、定家の
歌にて、

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕くれ
とあり。以て其名称の由来を知るべし。

『茶器名物図彙』によると、菅屋文琳という茶入には、蓋表
に「夕暮」、蓋裏に「さひしさに宿を立出てなかむれは」と書
付のある箱が存在したことが確認できる。さらに「利休所持後
遠州公夕暮と名付本田能登守へ渡り其後菅屋と呼」とも記す。

『大正名器鑑』に掲載される管屋文琳と同一の茶入ではない可能性もあるが、『茶器名物図彙』の記述によると、この茶入は初め遠州によって「さひしさ」の和歌より夕暮と命銘され、のちに同じく夕暮を詠んだ「見渡せば」の和歌を由来として、管屋という銘を得た可能性が指摘できる。

○吹上文琳 中興名物

内箱蓋表に「吹上」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について『宗友記』は次のように記す。

一吹上

唐物ノウツラフ也小肩衝共イフヘキモノカ

秋風ノ吹上ニタテル白キクハソレカアラヌカナミノヨ

スルカ

〈漢作唐物瓢筆〉

○玉津島

挽家蓋に「玉津島」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

此茶人を玉津島と銘したるは、箱書付の筆者小堀遠州なるべし。而して袋箱の蓋裏に片桐石州筆にて天下六瓢筆の名

と

和歌の浦に又もひろは、玉津島おなし光の數にもらすな
の歌を書付けたり。

〈漢作唐物大海〉

○山桜大海 大名物

挽家蓋に「山桜」と書付あり、遠州筆と記す。また銘の由来について、次のように記す。

古今名物類集に『遅かりし恨も今は山さくら花なき頃のは
なに向ひて』

此歌の意によりて、昔より山櫻と申候由、惣体茶入の出
来遅櫻同前故に候哉

とあり。右歌の作者は、藤原為尹卿なり。

○八重櫻大海

内箱蓋裏金地色紙の中張紙に「八重櫻」と書付あり、遠州筆
と記す。銘の由来について、『宗友記』は次のように記す。

一八重桜

此大海南都合出タルヨシ

イニシヘノナラノ都ノ八重桜キヤウコ、ノヘニ匂ヒヌ

ルカナ

なお、古瀬戸茶人にも「八重櫻大海」という茶人が存在するが、『宗友記』がどちらの茶人を示すかは不明である。『大正名器鑑』は「其名称の由来は同一なるべし」と記す。

『大正名器鑑』第三編

〔古瀬戸之部肩衝〕

○可中 中興名物

内箱蓋表に「可中」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器目利聞書』は次のように記す。

可中遠州公御持所薄作出来至極フクレ一ツ有に依而ヤマイ葉ト云是レニ而道具之キツニ成ル故可中ト書ケハフヲハト

ヨマセル

可中にとふ人あらは須磨の津にもしほたれつ、詫こたゑん

○釣舟 中興名物

挽家蓋表に「釣舟」、内箱蓋表に「釣舟」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『宗友記』は次のように記す。

一釣舟

此器物藤堂大学頭高次公之御家ニ八十嶋勘兵衛ト云者所

持タリシヲ甫公求得セサセラレ古歌ヲ以被称

和田ノ原八十嶋カケテコキ出ヌト人ニハツケヨアマノ
ツリ舟

○浅茅肩衝 大名物

挽家蓋表に「浅茅」、胴に「色かはる野邊のあさちにをく露をすえ葉にかけて秋風そふく」、内箱蓋表に「浅茅」と書付あり。『茶器名物図彙』に遠州筆と記される。

○浅野肩衝 中興名物

遠州筆の添掛物に、銘の由来について次のように記される。

昔年浅野氏三人シテ所持して侍りける

よりて一器の為名ト

淡路國浅野をよめる歌に

いかにせむ志のふとすれとなにたて、

あさの、き、すかくれなき身を

雉子ならねとこのうつはものも

浅野のないたてるにや

正則公おほせいなひかたくて

筆を取なるへし

宗甫（花押）

〔古瀬戸之部文琳〕

○霜夜文琳 中興名物

挽家蓋に「霧夜」、内箱蓋表に「霧夜 文琳」と書付あり。『茶器名物図彙』は遠州筆と記す。また『茶器名物図彙』は銘の由来を記した「宗甫筆掛物」について、次のように記す。

霧夜似たる葉にや

古人之歌

さかしらに夏八人まねさ、の葉のさやく霧夜をわかひとりぬる

なお『大正名器鑑』によると、この遠州筆の掛物は「江戸火災の為め焼失せるを以て、今は酒井又次郎の写しを添ふのみ」とある。

○藻塩文琳 中興名物

挽家胴に「もしほ」、内箱表に「古瀬戸 文琳」と書付あり、遠州筆と記す。また銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

茶入の打ち侘びたる様を、藻塩たれつ、の古歌に寄せて小堀遠州の命銘なり。

〔古瀬戸之部丸壺〕

○相坂丸壺 中興名物

挽家蓋に「相坂」、内箱に「相坂」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、江月和尚筆の添掛物に次のように記される。

相坂之記

孤篷庵主一日袖二小壺一来賜二一碗茶一之次、告レ予云、此小壺元来無レ名如何目焉矣、於レ于レ茲有下傍人无意吟二古歌一者上

相坂のあらしの風は寒けれど行衛しらねは侘つ、そぬる

庵主聽二此一吟一、卒目二相坂一、予曰、何為然也。

庵主云、臨江齋山居之時、以二右之古歌一重而詠

あふ坂の嵐の風を侘てねし人のこゝろそおもひやらる、

玩弄小壺一底、同下如二這歌一者上乎、予曰、諾々、是故便見レ需レ着二一語一、遮裏無二隻字一、依二什麼一銘レ之矣雖レ然二如斯庵主一者、予二十余年之旧識也、難レ忘二厥親一、戲賦二一偈一露二醜拙一云。

柴扉獨閉去何之 紙被遮レ寒樂二此涯一
昨日非兮今日是 明朝難 易有二誰知一

元和三 丁巳 臘月 日 江月叟宗玩書

〈古瀬戸之部尻彫〉

○伊代簾 中興名物

内箱蓋表に「伊豫簾」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、小堀権十郎筆の添掛物に次のように記される。

昔年亡父孤蓬庵主、小壺をもとめ、伊よすたれと名付、其かたち、たとへばあみ笠といふ物に似て、物ふりてわびし、是故に古歌を以て

あふことはまはらにあめる伊よすたれいよく我をわひさするかな

我おろかなるながめにも、これをおもふに、忽然として侘しきすがたあり、又寂寞たり、まことなるかな、青苔日々にあつくとあるもしかり、年月をふるといへども、事とふ人もなく、安閑の境界は却而楽をまねき、富貴をねがはず、我まどはぬ年をこそ、秋の夜のながきに、老のねざめのつれ／＼におもひ出してしるし侍る。

〈古瀬戸之部大海〉

○八重桜大海 中興名物

内箱蓋表に「八重桜大海」と書付あり、小堀宗中筆の添書付に「之五字 宗甫筆」と記される。銘の由来について、『大正

名器鑑』は漢作唐物茶入「八重桜大海」と同一とする。

〈春慶之部朝日〉

○中路

内箱蓋表に「中路」と書付あり、遠州筆と記す。また蓋裏には「いそのかミ布留の中道なか／＼に見すは恋しと思ハましやは」と書付あり、中院通茂筆と記す。遠州、中院通茂どちらによる命銘かは不明である。

『大正名器鑑』第四編上

〈真中古之部野田手〉

○面影 中興名物

挽家蓋に「面影」、胴に「人はいさ思ひやすらむ玉かつらおもかけにのミいと、見へつ」と書付あり。また内箱蓋に「野田之「面影」とあり、『茶器名物図彙』はいずれも遠州筆と記す。

○猿若 中興名物

内箱蓋表に「猿若」、胴に「道閑老まいる 小遠江守」と書付あり、『茶器名物図彙』は遠州筆と記す。また添短冊に「と、めさるわかれよ君のそてのうちに我たましひをいれてこそやれ

宗甫」とある。銘の由来について、添書付に次のように記されている。

元清水道閑の所持なり、道閑は洪紙庵と号す、真名宗怡、世に風呂道閑、又古道閑と云ふ、洛陽の人、古田織部の門なり。伊達政宗の茶道たり、五百石を賜ふ。奥州に下るを、小堀遠州深く別を惜み、伏見にて茶入を贈る時、饒別として左の一首を贈る。

と、めさるわかれよ君のかそてのうちに

わかたましひを入れてこそやれ 宗甫

依て猿若と称す。

○宮城野 中興名物

挽家蓋に「宮城野」、内箱蓋表に「宮城野」、胴に「様く、心ぞとまる宮城野の花の色くむしの聲く」と書付あり。いずれも遠州筆と記す。また銘の由来について、『本朝陶器考証』は次のように記す。

宮城野 同上 千載・秋上・源俊頼

さまざまに心ぞとまる宮城野の花のいろいろ虫の聲

○山櫻 中興名物

内箱表に「山櫻」、裏に「やまたかみひととす、めぬ櫻花いたくな侘そ我見はやさむ」と書付あり、遠州筆と記す。

〈真中古之部橋姫手〉

○橋姫 中興名物

内箱蓋表に「橋姫」とあるが、遠州筆かは不明である。銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是ハある人求メ出し遠州公へ見せ申度人を以て申入れとも遠州公其時在京にて無是非帰りを待て見せ申銘を乞ひけれハ賞美のうへわれをまつらんとの心にて橋姫と号くさむしるに衣かたしくこよひもや我を待らんうちのはし姫此手之茶入をはし姫手といふ

〈真中古之部思河手〉

○思河 中興名物

挽家蓋に「思河」、内箱蓋表に「思河」、蓋裏に「思河 款冬のはなにせかる、おもひ河色の千人は下にそめつ、」と書付あり、遠州筆と記す。また銘の由来について、『名器名物図彙』は次のように記す。

是ハ黄葉もありて惣体出来うるハしく藤四郎作にハ珍らし

とて山吹の花にせかる、思ひ川色の千人八下にそめツ、此歌により号く

宗甫

〈真中古之部大瓶手〉

○常夏 中興名物

挽家蓋に「常夏」、内箱蓋表に「常夏」、蓋裏に「たしむへき」となりも志らぬ庭の面やひとりのためのとこなつの花」と書付あり。書付はいずれも小堀十左衛門筆と記されるが、『名物目利聞書』には「宗甫名」とあり、遠州による命銘と確認できる。

〈真中古之部大覚寺手〉

○泡沫 中興名物

内箱蓋に「泡沫」と書付あり、无上覚院筆と記す。外箱の書付によると「宗甫筆跡之箱文政癸未冬罹祝融炎仍補書之」とあり、文政六年（一八二三）に火災によって失われた箱に、遠州による書付があつたようである。銘の由来について、添書付の包紙に次のように記されている。

御類焼御箱篋書付小堀遠江守

後選集二

思川たえすなかる、水のあわの

うたかた人にあはてきえめや

〈真中古之部藤四郎〉

○木の本 中興名物

挽家胴に「木の本」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

小堀遠州の物数寄にて

花の春紅葉の秋にあらぬまもた、には見えぬ木の本ぞこれ

の古歌に思ひ寄せたる命名なり。

また内箱蓋裏に、松平武雅による銘の由来となった和歌の書付がある。

〈真中古之部柳藤四郎〉

○清水 中興名物

挽家蓋に「清水」と書付あり、遠州筆と記す。また銘の由来について、『万宝全書』は次のように記す。

柳手 此根元ハ遠州公関東にくだり給ふ折ふし小家の棚

のはしに有を見給ひ今しバしとて駕籠を留てもとめ給へり

道のべに清水渡る、柳陰しハしとて社立留りつれ

此歌の心をもつて名付給ふと也

〈藤四郎春慶之部〉

○雪柳 中興名物

挽家蓋に「雪柳」、内箱蓋表に「雪柳」、蓋裏に「かつらきや

春のミゆきのふる柳よそめはおつる瀧のしらいと」と書付ある。

いずれも「筆者未詳」と記すが、『茶器弁玉集』には遠州の命

銘とある。次に引用する。

雪柳春慶ハ遠州家来村瀬氏所持ノ茶入也柳ノ枝ニ雪降積ニ

似タレハトテ政一朝臣古歌ヲ引名付玉フトナリ

カツラキト云五文字ニテ柳ニ雪ラムスヒタル古歌也失

念

『大正名器鑑』第四編下

〈金華山之部飛鳥川手〉

○飛鳥川 中興名物

挽家蓋に「飛鳥川」、胴に「きのふといひけふとくらしてあ

すか川なかれて早き月日なりけり」、内箱蓋に「飛鳥川」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是ハ遠州公和泉之堺にて初めて見給ふ此時ハいまた茶入わかく見へ其後伏見にて見給ふ時ハ誠に年も過行はかりにふるく見へ依之流れてはやく月日なりけりといふ古歌を引きて賞美せられ飛鳥川と号けらる

〈金華山之部玉柏手〉

○玉柏

挽家胴に「玉柏」、内箱蓋に「玉柏」と書付あり、遠州筆と記す。

銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是ハ遠州公秘藏之茶入にて元来ハならや弥兵衛といふもの大阪にて取り出せり難波にて得たりとて玉柏と号けらる尢青江よく似て胴ニ砂石あり依之旁々玉柏と名ツク難波江のものにうつもる、玉かしハあらハれてのミ人を恋めや此歌引き給ふ是をホンカとして此手を玉柏手といふ

また小堀宗中筆の添書付にも、銘の由来について次のように記される。

千載和歌集 卷十一

戀歌一

堀河院の御時百首のうたたてまつりける時

初戀のこゝろをよめる

難波江の藻にうつもる、玉柏あらはれてたに人を戀ひ
はや

右玉柏引歌之正歌に御座候

○常盤 中興名物

内箱蓋表に「常盤」、蓋裏に「常磐なる松乃みとりも春くれ
はいまひとしほの色増りけり」と書付あり、遠州筆と記す。銘
の由来について、『本朝陶器考証』は次のように記す。

常盤 今古・春上・源むねゆき

常盤なる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり
此茶入年々ふるくなるにしたがひ色まさると言事のよし

○村雨 中興名物

挽家胴に「村雨」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来につ
いて、『大正名器鑑』は次のように記す。

遠州公十八品御選といふ書に「かなげ葉下よりのほるの心
にて村雨と付けたり」とあり、即ち寂蓮法師の

村雨の露もまた乾ぬ槇の葉に霧たちのほる秋の夕くれ

の歌意に由りて、之を村雨と名け挽家の胴に槇の立木を沈
金彫にしたるは、皆な小堀遠州の物数寄なり。

また内箱蓋表には小堀十左衛門による「村雨」の書付がある。

○玉藻

挽家蓋に「玉藻」、内箱蓋表に「たまも」と書付あり、遠州
筆と記す。銘の由来について、添書付に次のように記される。

金花山窯玉柏玉藻茶入引歌

難波江の藻に埋る、玉柏あらはれてのみ人をこひはや

○増鏡 中興名物

挽家蓋に「増鏡」、内箱蓋表に「増鏡」、蓋裏に「ます鏡手に
取持て朝くなくミれとも君にあく時そなき」と書付あり、遠
州筆と記す。

〈金華山之部瀧浪手〉

○志賀 中興名物

挽家蓋に「志賀」、胴に「みせはやな志賀のからさき麓なる
なからの山のはるのけしきを」、内箱蓋表に「志賀」と書付あり、

遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

慈円
新古今集雑上、春の頃大乘院より人に遣しける、前大僧正

見せはやな志賀の唐崎ふもとなるなからの山の春のけしきを

とある歌を、茶人の景色に引きくらべて、小堀遠州の命名せしものなり

〈金華山之部生海鼠手〉

○妹背山

挽家蓋に「妹背山」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来として、松平乗邑筆の添書付に次のように記される。

(前略) 小堀遠江守銘付たるにも無音と云茶人あり豊後守家に有之又黄葉にて道得といふ茶入松平伊賀守に有之何も手筋すくなしこの茶人は道得と云茶人の手も見所多き故古歌を取てみれともあかぬと云也

また外箱胴に「浅緑かすミわたれるたへまより見れともあかぬいもせ山かな」と書付あり、小堀権十郎筆と記す。

〈金華山之部広沢手〉

○広沢 中興名物

内箱蓋表に「廣沢」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是ハ松平備前所持にて遠州公へ見せ給ふ殊之外賞美せられか程の茶入を今迄見ざる事よとて古歌を引きて広沢と号らる広沢の池の面にも身をなして見る人もなき秋の夜の月

○春雨 中興名物

挽家蓋に「春雨」、内箱蓋表に「春雨」、蓋裏に「ひろさはの池のつ、みの柳かけみとりもふかくはるさめそふる」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

茶人の置形春雨に濡れて縁の色深き柳に似たれば、風雅集春の歌の中、

前大納言為家

廣沢の池の堤の柳かけみとりも深く春雨そ降るの歌意に由りて、小堀遠州の命名なり。

〈金華山之部眞如堂手〉

○鏡河 中興名物

内箱蓋表に「鏡河」、蓋裏に「か、み河かけ見る月にそこす
ミて志つむ雲井のはつかしきかな」と書付あり。『茶器名物図彙』
は遠州筆と記す。

○鏡山 中興名物

内箱蓋表に「鏡山」、蓋裏に「立帰又こそ見つれ鏡山つれな
き老のかけをうつして」と書付あり。『茶器名物図彙』は遠州
筆と記す。

○玉柳

内箱蓋表に「玉柳」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来に
ついて、『大正名器鑑』は次のように記す。

「朝みとり露置きみたる春雨にしたさへ光る玉柳かな」の
歌意に由りて名づく。

〈金華山之部盤余野手〉

○盤余野

内箱蓋表に「盤余野」、蓋裏に「はきか花たれに見せむうつ
らなくいはれの野への秋の夕くれ」と書付あり、遠州筆と記す。

銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是ハ出来もよくうるハしきなれともすこし淋しき風情あり
て南となくしつほりと見ゆるによりはきか花たれに見せ
らうつら鳴いはれの野への秋の夕暮此歌により銘とせらる

〈金華山之部二見手〉

○二見 中興名物

挽家胴に「弑見」、内箱蓋表に「弑見」と書付あり、遠州筆
と記す。銘の由来について、『名物目利聞書』は次のように記す。

此茶入赤柿色にとり金氣有之石はせ紫土本糸かたの廻りに
も金氣立すそにも一筋有之見事玉の如し

玉くしけ二見か浦の貝しけみまきゑに見ゆる松のむら立

〈金華山之部藤浪手〉

○藤浪

挽家蓋に「藤浪」、内箱蓋表に「藤浪」、蓋裏に「延喜御製か
くてこそみまほしけれ万代をかけて匂へる藤浪の花」と記す。

『茶器名物図彙』に遠州筆とあり、銘の由来について次のよう
に記す。

是ハ橋姫手の如く惣体麗しく黄葉等ありて珍敷出来也遠州

公時代安藤対馬守所持にて藤原氏なる故延喜之御製を以て
祝し藤浪と号らるかくてこそみまほしけれ万代をうけて
忍へる藤浪の花

『大正名器鑑』第五編上

〈破風窯之部翁手〉

○増鏡 中興名物

挽家蓋に「増鏡」、胴に「ますか、みそこなるかけにむかひ
ゐてミるときにこそしらぬ翁にある心地すれ」、内箱蓋表に「増
鏡」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器名
物図彙』は次のように記す。

是ハ翁手といひて右の翁についての出来なり依之ますか、
ミ底なる影にむかひてハしらぬ翁にあふ心地すれといふ古
歌により増鏡と号く古翁手ハ世に多きものなれとも此ます
鏡類すも又稀なり

〈破風窯之部洪紙手〉

○笥 中興名物

挽家蓋に「笥」、内箱蓋表に「笥」、蓋裏に「住は又すまれこ
そせめ山里のかけひの水のあるにまかせて」と書付あり。『茶

器名物図彙』は遠州筆と記す。

〈破風窯之部皆の川手〉

○みな の川 中興名物

挽家蓋に「みな の河」、内箱蓋表に「みな の河」と書付あり。
また遠州筆の添掛物色紙に「ゆくはるのなかれてはやきみな
の河かすみのふちにくもる月かけ」とある。『茶器名物図彙』は
遠州筆と記す。

〈破風窯之部音羽手〉

○音羽山 中興名物

挽家蓋に「音羽山」と書付あり。また添掛物短冊に「音羽山
音羽山をとにき、つ、相坂の関のこなたに年をふるかな」とあ
り、いづれも遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器名物図彙』
は次のように記す。

是ハ遠州公此茶入かねて聞給ひ其後伏見にて求らる音羽山
音にき、つ、逢坂の関のこなたに年もふるかな此歌の心を
以テ音羽山と号けらる此手を音羽手といふ

〈破風窯之部正木手〉

○正木 中興名物

挽家蓋に「正木」、内箱蓋表に「正木」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

案ずるに、正木は正木の蔓といひ、冬にいたりて紅葉するものなり、此茶入の片身替り正木の葉の霜に飽きて、将に黄葉紅葉に変ぜんとする景色に似たれば、古今集の「深山には霞降るらし外山なる正木のかつら色つきにけり」又は新古今集の「神無月時雨降るらし佐保山の正木のかつら色まさりゆく」などの歌意に由りて、斯く名づけたる物なるべし。

〈破風窯之部玉川手〉

○玉川 中興名物

挽家胴に「玉川」と書付あり。また添掛物色紙に「玉川いませみるのちの玉川たつねきていろなる浪の秋のゆふくれ」とあり、いずれも遠州筆と記す。銘の由来について、『茶器名物図彙』は次のように記す。

是も遠州公所持にて此茶入作葉もうるハしなからおとなしくしつとりと淋しき所もあるゆへいまそしる野路の玉川たつね来ていろなる浪に秋の夕暮此うたの心を以て玉川と号

ケ給ふ此手を玉川手といふ

〈破風窯之部市場手〉

○忘水 中興名物

挽家蓋に「忘水」、内箱蓋表に「忘水」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は「皆の川手忘水名称の条に詳なり」と、皆の川手忘水と同一の由来であると記す。皆の川手忘水の「名称」項には次のように記されており、こちらの茶人は阿部豊後守正武による命銘であると確認できる。

風雅集戀歌の部に

従三位頼政絶えて久しくなりにける女、又語らひける人に志られて後、逢ひ侍りて申し遣しける。 讀人しらず
すむとしもなくたえにし忘水何故さても思ひ出で
けむ
とあるに対して

人もみなむすふ身なれと忘水我のみあかぬ心地こそ
すれ

と頼政が返歌の意に因りて、阿部豊後守正武の命名せし者なり。

○卯花

挽家蓋に「卯花」、内箱蓋表に「瀬戸 肩衝」、蓋裏に「うの花のさかりならずハ山賤のかきねに誰か心とめまし」と書付あり、遠州筆と記す。

〈後窯之部利休窯〉

○谷川 中興名物

内箱蓋表に「谷川」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『銘物記』は次のように記す。

谷川 宗甫銘ニて則御所持也此茶入世に利休といふもの本家也利休時代ニ好給ひし物と見へたり

なかれてはうき世に出ときくなればかげもとめまし谷川のミズ

此にて名つけ給ひしとなん

〈後窯之部織部焼〉

○濔標 中興名物

挽家蓋に「身をつくし」、胴に「身をつくしこふるしるしにこ、までもめくりあひけるえにハふかしな」、内箱蓋表に「濔標」と書付あり、遠州筆と記す。また『銘物記』には「宗甫名身を

つくし」とある。

〈後窯之部正意〉

○岡邊 中興名物

内箱蓋表に「岡邊」、蓋裏に「衾たてるをかへにむかふ達磨とのくれゆくそらをあハれともみよ」と書付あり。『茶器名物図彙』は遠州筆と記す。

〈後窯之部萬右衛門 落穂手〉

○田面 中興名物

挽家蓋に「田つら」、内箱蓋表に「田つら」と書付あり。また添掛物色紙に「うちわひておちほひろふときかませは我も田つらにゆかましものを」とあり、いずれも遠州筆と記す。銘の由来について、『本朝陶器考証』は次のように記す。

天王寺屋慶子所持の茶入、是（筆者注…萬右衛門作の茶入落穂）に似たるやう申たれば取らせ見せられよと有し故、慶子即ちとりよせ遠州公に見せられたれば、是同やう萬右衛門の作なり、随分大切にいたされよとありたれば慶子何とか銘を願ひたれば田面と名付給ふ、慶子長く家に傳へしと云なお銘の由来となつた茶入落穂は『大正名器鑑』編纂時点で所

在不明となつてゐる。遠州・江月和尚兩筆による書付の添掛物があるが、これは本来落穂に添つていたものとされる。以下に引用する。

落穂

うちわひておちほひろふときかませは我も

田つらにゆかましものを

小壺一覽候さる所にて

ひろひ出し給へるよし

ことにわひたる躰にまかせ

落穂とも可被申候

昌俊老

種風一降来

印（江月）

宗甫（花押）

○鳥羽田 中興名物

挽家胴に「鳥羽田」、内箱蓋表に「鳥羽田」、蓋裏に「友雀ひ

きゐてをりぬ山城の鳥羽田の面に落ほひろふと」と書付あり、

遠州筆と記す。

『大正名器鑑』第五編下

〔国焼之部唐津〕

○思河 中興名物

内箱蓋表に「思河」、蓋表に「おもひ川まれなる中になかるなりこれにもわたせ鵲の橋」と書付あり、『茶器名物図彙』は遠州筆と記す。

〔国焼之部備前〕

○鏡山 中興名物

内箱蓋表に「鏡山」、胴に「立婦又こそ見つれ鏡山つれなき老のかけをうつして」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、月桂筆の添卷物に次のように記される。

小川の道閑、予に語つて曰く、或時小堀氏宗甫居士を伏見邑に問ひ奉りしに、折から居士の備前の國より陶工師を招て、小壺の形を作らしむ、閑も又自ら一壺を形して我名を底に顕し、数々の調度のうちにまじへ、備州へやりぬ。其後居士好める物皆就りて伏見へ来るに、彼の閑の造れるは失て見へず、嗚呼いかなる事にやと、ひたすら惜まるゝ所に、年歴て東山の辺を遊行、商屋の門に小壺見えたり、其形極て勝れりとはかり見てたち去りぬ、暫して立婦、手に触ければ、昔我が伏見にて所作の物なり、終に求めもてゆ

き、宗甫居士の笑覧にそなへし也。居士戯の余りに、鏡山となつくとなん。紫山七十余の老翁、夢中に夢を説ならし。

月桂（花押）

〔国焼之部高取〕

○染川 中興名物

○秋の夜 中興名物

高取茶入染川と秋の夜は一つの箱に収められる。内箱蓋表に「そめ河 秋の夜」と書付あり、遠州筆と記す。この二つの茶入は、黒田忠之が遠州に命銘を依頼したものである。染川の銘の由来について、遠州筆の添巻物に次のように記される。

むかしおとこつくしまていきたりけるに

これハいろこのむといふしきものとす

たれのうちなる人のいひけるをき、て

染川をワたらむ人のいかてかは

いろになるてふことのなからむ

伊勢物語にかくのことく御座候御国之

名所に存候間如比候此ちや入を見る

人色にしまぬ事ハあるましきと

いふ心也

右の哥の返し

名にしおは、あたそあるへきたはれしま

なミのぬれきぬきるといふなる

茶入のいまた出来ぬさきよりなをつけて

記を御書候へと和尚へ御所望ハあたる事也

たはれしまなるへし

他見御無用に候

右衛門佐殿 旨

また秋の夜の銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

秋の夜は、伊勢物語に

秋の夜の千代を一夜になぞらへて八千代し寝はや飽く

時のあらむ

といへる歌意に因りて名つけたるにて、江月和尚の秋夜記

中の文に、千箇之内選得一箇之義分明也とあり、

○玉柳

内箱蓋表に「玉柳」、蓋裏に「たまやなき匂ふともなき枝なれとみどりのいろのなつかしきかな」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

玉葉和歌集春歌上、加茂の社によみて奉りける百首の歌に、
柳

たま柳にほふともなき枝なれとみとりの色のなつかしき
かな

の歌意に由りて名づく

〈国焼之部丹波〉

○柴の戸

内箱蓋裏に「柴戸」、蓋裏に「柴之戸にゆふ日のかげのさし
なからいかにしくる、山邊なるらむ」と書付あり、遠州筆と記
す。銘の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

新古今集冬歌清輔朝臣

柴の戸に入日の影はさしなからいかにしくる、山邊なる
らむ

の歌意に由りて名づく、遠州箱書付には「入日の影は」を
「ゆふ日のかげの」と成せり

○山桜

挽家蓋に「山桜」、胴に「さくときハもの、かすにハあらね
ともちるにハもれぬ山桜かな」と書付あり、遠州筆と記す。銘

の由来について、『大正名器鑑』は次のように記す。

挽家胴に小堀遠州筆とおほしく、

咲く時は物の数にはあらねとも散るにはもれぬ山桜かな
の歌あり、即ち此茶入の銘の出所なるべし。

〈追加之部古瀬戸尻彫〉

○破被 中興名物

内箱に「ヤフレフスマ茶人」と書付あり。『大正名器鑑』は「古
来筆者不知とあれど、此茶入の所持者長閑堂久保権太夫の筆な
るべし」と記す。銘の由来として、添書物に遠州筆で「むらさ
きやあけの衣もうらめしくやふれふすまにまつかせのを」と
ある。この和歌は『大正名器鑑』によると「江月和尚の師叔仙
嶽禅師の閑居雜詠」という。

〈追加之部古瀬戸肩衝〉

○朝寝髪

挽家蓋に「朝寝髪」、内箱蓋表に「古瀬戸 朝寝髪」、蓋裏に
「あさ寝かみ我はけつらしうつくしき人の手まくらふれてしも
のを」と書付あり、遠州筆と記す。銘の由来について、『大正
名器鑑』は次のように記す。

万葉集第十一柿本人麿の

朝宿髪 吾者不梳 愛君之手枕 觸義之鬼尾

とある歌意を、茶入の置形黒髪の乱れらるるが如き景色に思ひ寄せて、小堀遠州の命名なり。

〔追加之部大瓶手〕

○御裳濯川

挽家蓋に「みもすそ川」、胴に「立かへり又もみまくのほしきかなみもすそ川の瀬々の白浪」、内箱蓋表に「みもすそ川」と書付あり、遠州筆と記す。

〔追加之部飛鳥川手〕

○雲井 中興名物

挽家蓋に「雲井」と書付あり、小堀備中守宗慶筆と記す。また内箱蓋表に「雲井」と書付あり、曲直瀬道三筆と記す。小短冊に「雲井 いはねともわかきりなき心をハ雲井にとをき人もしらなむ」とあり、遠州筆と記す。

〔注〕

(1) 『大正名器鑑』は、箒庵が編纂した「大正時代に調査し

たる名器の図録」である。大正十年（一九二二）から昭和元年（一九二六）にかけて九編十一冊が刊行され、昭和二年（一九二七）に索引が加わり完結した。初版刊行から約十年後の昭和十二年（一九三七）には普及版として、宝雲舎版『大正名器鑑』が刊行されている。また普及版の冒頭に記された箒庵の記述「普及版刊行に際して希望を宣ぶ」によると、初版の『大正名器鑑』は「芸術的趣味的見地より、印刷製本等に最善美を期したので、価格が高く、部数が少く、出版直後より己に絶本と為りて、広く世間に流布する事を得ざりし」ものであった。

なお『大正名器鑑』は、第一編から第五編に「茶入之部」、第六編から第九編に「茶碗之部」を掲載する。収録された茶道具は茶入四三六点、茶碗四三九点の計八七五点であり、所持者の数は一五五人にのぼる。以下は『大正名器鑑』全九編の目次と、掲載される茶道具の点数である。

【茶入之部】

第一編 漢作唐物・肩衝五三点、茄子十七点

第二編 漢作唐物・文琳二五点、瓢箪三点、丸壺十三点、

大海六点、鶴首及鶴子七点、雑十六点、島物三点、

追加肩衝一点

第三編

古瀬戸之部・肩衝四五点、文琳三点、丸壺一点、
尻彫一点、柿一点、胴高一点、耳付一点、芋子四点、
大海七点、春慶之部・朝日四点、文琳一点、瓢箪
五点、雜八点

第四編上

真中古之部・野田手六点、橋姫手三点、思河手二
点、大瓶手三点、大覺寺手四点、面取手六点、小
川手四点、藤四郎四点、柳藤四郎三点、糸目藤四
郎一点、虫咀藤四郎一点、藤四郎春慶部・雪柳手
一点、塞手三点、ノ切一点、瓢箪二点、後春慶之
部・正信二点

第四編下

金華山之部・飛鳥川手五点、玉柏手八点、瀧浪手
七点、生海鼠手八点、大津手四点、横沢手四点、
真如堂手八点、盤余野手一点、二見手二点、藤浪
手一点、天目手一点

第五編上

破風窯之部・翁手二点、九手四点、口広手五点、
波紙手七点、皆の川手三点、音羽手二点、正木手
二点、橋立手一点、玉川手一点、米市手五点、市
場手四点後窯之部・利休窯五点、織部窯四点、正
意五点、萬右衛門四点、新兵衛八点、宗伯一点、
吉兵衛一点、茂右衛門一点、源十郎一点、鳴海窯

一点

第五編下

国焼之部・唐津二点、祖母懷二点、備前五点、伊
部二点、薩摩八点、高取九点、膳所二点、丹波六
点、信楽一点、志戸呂一点、追加之部十点

【茶碗之部】

第六編

天目之部・曜麥六点、油滴五点、建盞五点、灰被
十点、玳皮盞十一点、

雜天目十一点

青磁之部四点、割高台茶碗九点、人形手之部
五点、雲鶴、狂言袴之部十点、熊川之部六点、玉
子手之部八点、雨漏堅手之部八点、御所丸之部十
点

第七編

井戸之部・名物手二六点、古井戸十七点、小貫乳
四点、青井戸二四点、井戸脇四点、呉器之部十一
点、魚屋之部十二点、柿の帯之部七点、蕎麥之部
三点、御本之部二点

第八編

伊羅保之部十七点、粉引之部五点、三島之部十七
点、刷毛目之部十二点、楚白之部二点、金海之部
四点、高麗之部十一点、奥高麗之部二点、瀬戸之
部九点、伯庵之部八点、元贊之部一点、織部之部
二点、志野之部六点、唐津之部五点、薩摩之部一点、

丹波之部一点、高取之部一点、萩之部三点、朝日之部二点、信楽之部二点、新兵衛之部一点、伊賀之部一点、大樋之部一点、久谷之部一点

第九編

長次郎之部三十点、尼焼二点、常慶之部一点、ノンカウ之部二点、宗全之部三点、原叟之部五点、光悦之部一八点、空中之部一点、不昧之部二点、非黙之部一点、鳥子之部一点、赤絵之部二点、柴付之部五点、祥瑞之部一点、仁清之部九点

- (2) 高橋義雄「謝恩記」(『大正名器鑑』第一編、宝雲舎、一九三七年)

- (3) 三井記念美術館所蔵

- (4) 『大正名器鑑』第一編「遅桜肩衝」項雑記に、『徳川家所蔵御道具書画目録』の記述が引用されている。

遅桜肩衝銘漢作遅桜は初花に對して也、茶入東山義政公の時、初花より以前に名器選舉ならば、世上第一に唱ふべきを、初花第一とありし後に挙げたれば、次に付けたるならん。金葉集に「夏山の青葉交りの遅桜初花よりもめつらしき哉」、此歌意にて東山殿銘せられしとなん

- (5) 徳川記念財団所

- (6) 草間直方(号和楽、一七五二〜一八三一)の編著。序文

に「文政十丁亥とし初冬開炉之辺に誌之 七十五才和楽」とあり、文政十年(一八二七)成立。全九十五卷。

- (7) 遠州流茶道七代家元小堀政方(号宗友、一七四二〜一八〇三)の編著。序文に「干時明和二年乙酉中春七代之孫宗友拵之 七代目宗友政方記之」とあり、明和二年(一七八二)成立。写本全三卷。

- (8) 編者不明。跋文に「寛文拾貳壬子年初春吉旦」「二条通玉屋町上村次郎右衛門刊行」とあり、寛文十二年(一六七二)刊行。全三卷。

- (9) 菊木嘉保(生没年不明)の編著。元禄七年(一六九四)成立、享保三年(一七一八)初版。全十卷十三冊。

- (10) 編者・成立年不明。写本一冊。

- (11) 編者・成立年不明。写本一冊。

- (12) 金森得水(一七八八〜一八六五)著。跋文に「安政四年秋八月」とあり、安政四年(一八五七)八月成立、明治二十七年(一八九四)三月に松雲堂書店より刊行。全六卷。

- (13) 編者不明、明治四十三年(一九一〇)写。

(ふじわら みずき/本学大学院生)